

日米数学研究所 (JAMI) とその支援をめぐる

国際基督教大学 教養学部
清水 勇二

この小文は、戸瀬「数学通信」編集委員長の求めに応じて JAMI が出来たときのいきさつや最近の署名運動などについて筆者の知る限りで記したものです。

また、本文の記述に関して次の方々に感謝します。内容の確認に関して、森田康夫氏、河野俊丈氏、森下昌紀氏に。要望文に関して、花村昌樹氏、Martin Guest 氏に。メールの掲載に関して、Steve Zucker 氏に。以下では、敬称を略させていただきます。

1. 日米数学研究所とは

日米数学研究所 (JAMI) は、米国 Maryland 州 Baltimore にある Johns Hopkins 大学内に、1988 年に設立された研究所である。その英語での正式名称は、Japan-U.S. Mathematics Institute である。JAMI の設立の経緯については、文献 [1]~[4] に記載されているが、ここでも簡単に振り返ろう。

設立の趣旨は、JAMI のホームページ [0] にも記されている次の目標であろう。

The goal of JAMI is to foster friendly relationships between Japan and the United States; its academic purpose is to formalize and extend the long-existing relationship between the department and the Japanese mathematical community, and to use that relationship more generally to further mathematical interactions between the two countries.

Johns Hopkins 大学には、1970 年代までに青本和彦、服部晶夫、小平邦彦、久賀道郎、松村英之、森川寿、塩田徹治、玉河恒夫、田村一郎、吉沢尚明といった方々が滞在しており、日本との関係も密であった。また、Johns Hopkins 大学数学教室には、1980 年代にもホモトピー論、数論、代数幾何学の専門家が多く、さらに、井草準一、小野孝と 2 名の日本人数学者がいた。このような状況において、Wilson、Morava、Meyer、井草、小野の 5 人による委員会ができて JAMI の構想が膨らんでいったいきさつが [1] に窺える。

JAMI の特色としては、(I) 毎年特定の研究分野を決め、(II) その分野の日本人研究者約 4 名を JAMI に招待し、その年齢は 30 - 40 歳、という方針が、最初は貫かれていたようだ。初期には、JAMI の所員 (招待研究者) は長期滞在していたが、財政的な事情もあって、短期滞在者が中心となり、その代わり所員の数は増えた。分野、招待研究者の決定は、Johns Hopkins 大学の何名かを含む諮問、実行、推薦委員会が行なう。

日米という 2ヶ国の名前を頂いているのは他に例をみない。JAMI の初代所長 (Director) は、井草準一で、その後 Jean-Pierre Meyer、Jack Morava、Steven Zucker が引き継いでいる。

例えば、第 17 年目の 2004/05 年度について見てみよう (cf. [0])。分野は、Hodge Theory and Log Geometry で、加藤和也、斎藤秀司、臼井三平、Steve Zucker の 4 氏が組織委員であり、組織委員を含む 7 名の所員が予定されている。2005 年 3 月 14-20 日に予定されている JAMI Conference には、多くの研究者が集まることになる。

JAMI は独立した建物やスタッフを持たず、Johns Hopkins 大学数学教室の部屋を利用し、そのスタッフが事務を行なっている。Johns Hopkins 大学数学教室は、Baltimore の静かな郊外にあり、Baltimore-Washington 国際空港からも車で 30 分程度で便利である。

2. 最近の支援活動：署名運動

JAMIは、その経済的基盤を Johns Hopkins 大学からの支援の他に、様々な寄付に頼ってきた。井草準一、広中平祐、落合卓四郎氏等が、平成元年から7年までの間に、日本の企業等から合計3千万円以上の寄付を JAMI のために集められた、と伺っている。この資金援助のお願いのため、井草、Meyer 教授等がわざわざ渡日され自ら足を運ばれている。

こうした不安定な経済的基盤に加えて、Johns Hopkins 大学における変化・世代交代があり、特に、井草・Meyer 両教授の退任、小野先生が JAMI の中心から退かれたことは JAMI をめぐる状況を変化させた。

こうした状況の中、2004年9月下旬、現在の JAMI 所長の Zucker 氏から日本数学会理事長の森田康夫氏に一通のメールが届いた。

Dear Professor Morita,

I am writing to you at the suggestion of Professor Toshitake Kohno.

You, as the President of the Mathematical Society of Japan, may well have a good idea of how Japanese mathematicians feel about many things. What I am concerned with now is the sentiment towards the Japanese American Mathematics Institute (JAMI).

Please let me explain. JAMI was founded in 1988 by a sort of agreement between mathematicians in Japan and those at the Johns Hopkins University. In 1988, almost everyone in my Department could benefit personally from JAMI. Now, the composition of the Department is different, and a growing number of my colleagues feel that a true high-level JAMI program in their research area is not feasible.

These people want, in effect, to change JAMI to AMI. By that I mean they wish to be able to use the allocation for JAMI in the Department budget for ANY sort of visitor/conference set-up chosen by the JHU organizer, one that might have no Japanese visitors at all. One of them even feels we could make this change without consulting Japan. If we did something like that, the special place of Japan in our institute would become terminated by default.

As Director of JAMI, I find myself in a strange situation. I am happy to keep JAMI as is. You may know that I am the JHU organizer of this academic year's program in Hodge Theory and Log Geometry, a traditional sort of program with a total of seven Japanese mathematicians visiting. On the other hand, I can understand the feelings of my colleagues.

I am hoping you can provide an honest statement of how "Japan" feels about the importance of JAMI, and how much Japanese mathematicians want JAMI to continue. That could well influence the ultimate resolution of the situation.

Sincerely, - Steven Zucker.

日本数学会は JAMI への資金援助を (多額ではないが) 行なってきたが、Zucker 所長は日本人数学者の JAMI への期待・評価といったことの表明を、日本数学会を通じて求めていた。

そこで、森田理事長はすぐに数学会理事を含む 20 数名に JAMI をめぐる状況についての意見を求めた。1 週間もすると、いろいろな方の意見が集まり始めた。筆者も JAMI に滞在したことのある者として、JAMI の存続を希望する趣旨を森田理事長に送ったが、理事長から「JAMI に関係した人で、継続要望の署名 (以下にある程度の要望文 + 参加する人の名前) を集めて、1 週間程度で私に送って」もらえないか、との願いがあり、署名運動が始まった。ここで、「以下にある程度の要望文」とあるのは、筆者の書いたごく簡単な存続の表明であった。それを改めたものと、都立大学の Martin Guest 氏に直していただいた英訳が次の要望文である。

要望文

JAMI のプログラムに参加させていただいたこと、Johns Hopkins 大からの支援を感謝する我々は、JAMI の継続を希望しています。JAMI の現状は厳しいことを理解しますが、日米の数学者が良好な交流を続けてきた証を、何らかの形で残せること、を希望します。

Having deep gratitude to JAMI as a result of our participation in its programs, and to the Johns Hopkins University for its support, we express our hope that JAMI will continue to function. While we appreciate the difficult circumstances facing JAMI, we urge that this manifestation of the excellent relationship that has been established between U.S. and Japanese mathematicians be permitted to remain in some form.

この要望文を、JAMI 参加者の名簿にあり、E-mail address の分かる人にメールを送り、周りの人にもできれば伝えるようお願いした結果、70 名あまりの方から賛同のメールをいただいた。そのリストを森田理事長に 10 月 13 日には報告した。その後、要望文と賛同者のリストは森田理事長から Zucker 所長へ伝えられた。筆者の元には、JAMI への感謝の熱い思いを述べられた方も何人かいらした。

より具体的な JAMI への支援が実を結ぶこと、JAMI の存続と発展を祈りつつ筆を置く。

参考文献:

- [0] URL: <http://mathnt.mat.jhu.edu/jami/>
及び <http://mathnt.mat.jhu.edu/jami/Default5.htm>
- [1] 小野 孝, JAMI の誕生, 数学セミナー 1988 年 11 月号, 46–29.
- [2] 関口次郎, 誕生した日米数学研究所, 数学セミナー 1989 年 12 月号, 58–62.
- [3] 清水勇二, 日米数学研究所 (JAMI) に滞在して, 数学 42, no.1 (1990), 80–84.
- [4] 小野 孝, 日米数学研究所—その現在, 過去, 未来, 数学 46, no.1 (1994), 51–56.